

編集後記

2016年オリンピック夏季大会招致に向けて、東京をはじめとする4都市がしのぎを削っている。この年報が発行された頃には結果が明らかになっているであろう。その一方、ラグビーのワールドカップ2019の日本開催が一足先に決定した。また、2016年のオリンピック夏季大会の追加種目として7人制ラグビーが採用された。

日本におけるラグビーの現状を見ると、部活動のレベルにおいては、少子化の影響等もあり、一つの学校でチームを組むことが難しくなっており、複数の学校合同でようやく試合に出場できる人数が集められるという状態である。また、企業の経営環境が好転の兆しが見えにくい中、企業チームの解散、休部が相次いでいる。ラグビーにおいても同様に、いやもっとも先鋭的に問題が現れており、かつて名門と言われた企業チームが数多く姿を消している。

こうした状況に対して、ワールドカップの日本開催等がどのようなインパクトを与えていくのか。その問いに対しては、今後、実態とともに答えが出されてくることになるが、グローバル化するスポーツ、その影響がローカルな場、生活の場であるコミュニティにおいてどのような現れ方をするのかについての一つの事例を提供してくれることは確かであろう。

グローバル化の時代、日々生起する現象に、応接の暇すら与えられていないようにも思える。しかし、それを地道にとらえていくことが研究にとって肝要である。本年報は、われわれのこの1年間にわたる継続的な研究活動の成果である。

今年度の年報のテーマタイトルを「グローバル化下のスポーツとコミュニティ」としたが、これは、文部科学省科学研究費との関連という側面もあるが、2年ほど前からこの場で表明しているように、スポーツにおけるグローバル化の様相、ローカルな場における様相、その双方を構造的にとらえ、相互のプロセスにおける「規定し、規定し返す」というダイナミックな側面の探求を表現するという意図からのものである。

ここ数年、月例研究会で大学院生の発表を1、2回程度組み込むという研究部方針に基づいて大学院生の報告が2回行われた。その成果は、本年報に掲載されている。

今回のゲスト研究会は、本学社会学研究科の猪飼周平准教授に報告をお願いした。先生の研究領域は医療制度の歴史的展開過程、その国際比較というものであるが、われわれのスポーツ研究との接点を意識しながら報告を行なっていただいた。それは、われわれのスポーツ研究との架橋の可能性を感じさせるものであった。研究会だけではなく、ご多忙の中、掲載原稿の校正作業にご協力をいただいた猪飼先生にはあらためて感謝申し上げたい。

これまでと同様、関根助手と渡辺助手の編集実務をはじめとする有形無形のサポートによって、ここに今年度の研究年報の完成を見た。記して謝意を表したい。

本年報は、文部科学省科学研究費「スポーツのグローバル化とコミュニティにおけるスポーツの変容に関する研究」(研究代表者：尾崎正峰、課題番号：20500538)の研究成果の一部である。

(研究部長・尾崎 正峰)